**［事後報告］アンリ・ルフェーヴルの戦略と戦術：日常性の認識から都市計画へ**

報告者：山本 千寛　（東京大学）　  
司会者：五野井 郁夫（高千穂大学）

概要：

　本報告では、「修理する権利」の先行研究において示された論点を足がかりとして、アンリ・ルフェーヴルの「都市への権利」が、どのような実践上の構図を想定しているのかについて「戦略に従属する戦術」という語彙に着目した検討をおこなった。第1節では、『都市への権利』におけるふたつの戦略――分断を促進する階級戦略と、労働者を中心に据えつつも分断を想定しない都市戦略――の対立を確認した。そのうえで、あくまで空間に固有のタイムテーブルを反映させることで、時間・空間の領有をめざすルフェーヴルと、所与の空間で横領的、即興的に〈なんとかやっていく〉セルトーの日常性の議論における差異についても確認をおこなった。

　こうしたルフェーヴルの都市戦略の姿勢を特徴づけているのが、「戦略に従属する戦術」という考え方である。そこで、第2節では1957年の著作『レーニン』に立ち返って、この戦略と戦術の特徴的な捉え方が、クラウゼヴィッツを読むレーニンの思想を受容するという経路で着想されていることを解明した。さらに第3節では、最終的な目標から現場を照らしかえすという「戦略に従属する戦術」が、『日常生活批判II』において「戦略的仮説」という作業仮説として練りあげられている点に着目した。この仮説における最終目標とは、目下の社会問題の認識を通して着想される「もっとも遠い可能なもの」、あるいは「横顔を見せてはいるけれども、極限においてしか実現されない潜在性」である。そうした潜在性として、都市のあり方もそのつど更新された姿で構想されつづけていくという点から、本報告では「都市への権利」において想定される実践の構図を明らかにした。

質疑：

質疑では、計4名から大きくわけて3つの論点についてコメントと質問が寄せられた。ひとつ目の問いは、ルフェーヴルの戦略では目標となる最終的な「決着点」が想定されているのかどうかである。これについては、1957年の論考「革命的ロマン主義」を参照しつつ、理論的なレベルでは、現時点では難しいものの到達可能であるはずの社会状態が想定されていたことを確認した。そのうえで、この理論的な目標に近づくための現実の都市のあり方をめぐる議論においては、完成形としての「理想の都市」ではなく、あくまで「突破口」となるような都市の構想が重視されていたという回答をおこなった。

ふたつ目の問いは、「戦略に従属する戦術」のうち「戦術」の側には具体的にどんな実践が想定されていたのかである。これについては、『都市への権利』（DV: 116=2011: 191）を参照しつつ、国家や組織の規模における分配（賃金の増額、国有化も含む）と、個人の規模でも可能な「ごく小さな戦術的行動」として「（一日の、一年間の）タイムテーブルを広げてみること」（DV: 116=2011: 191）を挙げた。すなわち、子を預けられる託児所があったらこんなふうに時間を使えるな、運動できる場所があればこんなふうに時間を使えるな、性教育や生活の工夫、芸術活動について教えてくれる「ごく簡単な社会教育機関」があれば一年のうちで、こういうふうに時間を使えるなという想像力を広げるという戦術である。

最後の問いは、冒頭の「修理する権利」の議論と「都市への権利」における「戦略に従属する戦術」との関係が、最終的にどのように整理できるのかである。これについては、検討が不十分な部分が多く残っていることを認めつつ、修理をめぐるコモンズ的な実践を主催者側と参加者側の双方の目的意識から見た場合に検討課題となる論点について回答をおこなった。